

彼岸の花に寄せて

東雲咲夜

彼岸の花にはせる思い

冬が訪れる前の、狭間の季節。少し寂しさを含んだ風に吹かれながら、女は歩いていた。足取りはゆったりとしていて、小さな手さげかばんを片手に。柔らかそうな髪はゆるく束ねられている。

時折風にあおられるのか、そっと片手で抑える。その仕草は、どこことなく憂いをはらんでいた。昼間だというのにその道は人通りがすくなく、静かだった。

歩いていた彼女の視線が、道の曲がり角へと吸い寄せられた——そこには赤を揺らめかせている彼岸花。

花の側には、小さな地蔵もあった。花の側へと近づいて、しゃがみこむ。

そうして彼女は、葉のない花へと手を伸ばした。

葬列のように並んで咲く彼岸花。毎年気がつくと、道端でこの花が揺れている。

子供のころは、その毒々しい色と形が不気味で。

今は、その鮮やかさも花卉も、綺麗だと思えるようになった。愛しい……あの人との思い出が香るから。

この花が咲く季節に出会って恋をした。もう別れてから何年が経っただろう。

彼は居間もどこかで、幸せに暮らしているんだろう。一度だけ。

去年の夏だったかな。彼から一通のはがきが来た。見知らぬ女性と嬉しそうに並んで微笑むあの人。

その人と結婚をしたそうだ。今年の春には子供が生まれるとあったから——今は数ヶ月くらいだろうか。

どうして私に送ったのかは、わからない。あの人なりのけじめの形だったのかもしれない。

特別、ねたましいとか、羨ましいとは思わない。彼は自分の幸せをその手で選び、掴んだだけだから。

花を見ながら思う。そんな風に私も生きられたら、素敵なのに。どうしても、その一步が踏み出せなくて。

私自身が動かなきゃ、いつまでもこの場所からは離れられない。

偶然訪れた恋が去って、私の時間は色褪せてしまった。見るものすべてが、あの頃とは違う。

どんなに願ったって、戻れないのはわかっている。それでも過去が懐かしくてたまらない。

初恋は実らないだけじゃなく、胸に痕だけを刻んで溶けた。

季節が巡り時間が流れても、私はここに立ち尽くしたままで。

細い花卉に触れて、もてあそぶ。この花と一緒に、この思いも流してしまえたらいいのに。

そうしたら、知らないどこかで、小さな芽を吹いてくれるかもしれない。

でも私は、花を握りつぶすことも、散らすこともできない……中途半端。

咲き乱れる花をいくつか手折って、私は一人の家へと向かって歩き出す。

家につくと、コップを一つ取り出して、水を注ぐ。そのまま花を入れようとして……手が止まる。

たしか、切花には砂糖水がいいって、どこかで聞いた。これは、切花でもないのだけれど。

もうしわけ程度の砂糖を水に溶かして、手折った花を入れる。

こんな適当なやり方じゃ、数日で枯れてしまうのはわかりきっている。

それでも毎年私は、花をこうして持ち帰ってしまう。道でふらふらと揺れる彼岸花を見ると、どうしてももって帰りたくなってしまふ。自分と、重ねてみてしまっているのかもしれない。

枯れてしまったら、庭に埋めて、土に還してあげないと。

彼岸花は葉がないときでも美しく咲き誇れる。私という花は、すぐに枯れてしまった。

あの人という葉が落ちて、それでも恋を維持できるほど……慣れてはいなかった。

朽ちた花卉は何処へも行けず、胸の奥深くに沈んでは積もっていく。

いつかは、私も彼の事を割り切れる日が来るのだろう。そうして、また別の誰かを好きになる。

誰かと結ばれても、きっと私は思い出し続けるのだろう。

毎年毎年、道端に花が姿を見せるたびに。

赤い彼岸花が風に揺れて。幾度もそれを手にとって、土へと還す。

流しきれない思いも一緒に行けるように。

寄せた思いがやがて巡って、また花を咲かせることができるように。

私はそうやって、生きていくんだらう。

彼岸の季節に咲いた恋は 死人の花に 寄せて揺れて

枯れ朽ちた恋はやがて、 小さな小さな芽を伸ばす